

ISSN 0910-2396

野鳥 —北海道— だより

第 75 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成元年 3 月 21 日



ロシアカツバメ 1988. 5. 4 天売島 撮影者 佐藤 幸典

日高路・静内の野鳥

谷岡 隆

私と野鳥との付き合いはまだ4～5年、ましてや、野鳥を見ても判別できる数は50種足らず、ただ、人より少し秀でた事といえば、カメラの写歴がチョッピリあるということだけ……。

しかし、その実態がほとんど知られていない日高地方の野鳥について、少しでも皆さんに知っていただけたらという素朴な気持ちでペンをとった次第です。従って、学術的なことや専門的なことは分かりませんが、私の知っている範囲で、静内の野鳥について紹介します。

●静内町はどんなマチ

鳥を語る前に「静内」とはどんなマチなのか、プロフィールを紹介します。

北海道で最大のアルプス型褶曲山脈で、氷河期カールによる男性的景観で知られる日高山脈を背に、前には太平洋が開かれており、2万6,000人の人口の大半は町の中央を流れる静内川の下流に集中しています。

太平洋に面しているため、気候は温暖で、夏は涼しく冬はほとんど雪も降らないといった、道内で最も温和な気候地帯です。

総面積の88%は山林、また耕地面積の85%が牧草地というように、わが国を代表するサラブレッドの生産地としてその名が知られており、緑豊かな自然環境に恵まれたマチです。

●フィールド・ガイド

町内には3カ所の鳥獣保護区が指定されており、概要は別表1のとおりですが、中でも真歌地区は静内市街に隣接していることもあり、町民とのふれあひも多い所です。

以下の主なフィールドを紹介します。

●真歌公園

標高80mの小高い丘陵が真歌山で、「寛文9年エゾの乱」でアイヌの英傑・シャクシャイが和人と戦った時のチャシがあった所で、シャクシャイン像やアイヌ民俗資料館などがあります。

丘は海(太平洋)、川(静内川)に囲まれ、丘上はサラブレッドの放牧風景が延々と続きます。

見どころは周年群れをなすトビと冬のオオワシ、オジロワシなどのワシタカ類と春のウグイスに代表される山野の鳥の数、種の豊富なところでしょう。

●うぐいすの森

真歌公園に隣接し、静内川が平行して流れています。保健保安林の指定を受け、自然林造や散策路、展望台ベンチ、トイレなども整備され、3.7kmの遊歩道はバードウォッチングやハイキングに最適な場所です。

その名のとおり、ウグイスやエゾムシクイ、ノビタキなどのヒタキ科、キセキレイ、ハクセキレイなどのセキレイ科が多く、ときにはエゾライチョウなども姿を見えます。

●静内川河口

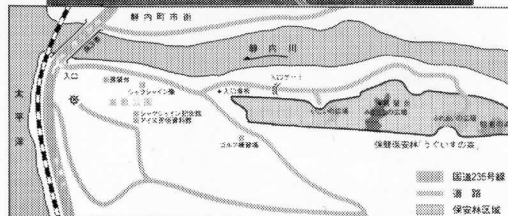
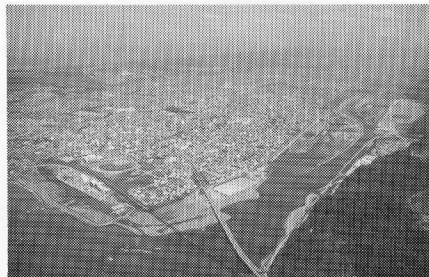
市街地を流れる静内川は、その上流部に5ヶ所の水力発電所があり、道内一のクリーンエネルギーの里として知られています。

鳥相の特徴は、なんとといっても日高管内一のオオハクチョウの越冬地であるということで毎年、70～80羽が10月下旬から4月上旬までの半年間、静内川河口で冬を越します。

今年1月15日の私の調査では、オオハクチョウ64、アメリカコハクチョウ1、マガモ84、コガモ130、オナガガモ1、ホオジロガモ15、ウミアイサ13、カワアイサ9、合計8種317羽を確認しております。

また、2月19日のオオワシ一斉調査では、オオワシ1、オジロワシ7を確認しております。

雪も少なく、冬の楽しみも少ない当地方で、白鳥とのふれあひを求める人も多く、平日で50組、日曜日には数



百組の町民がパンなどの給餌にやって来ます。

<珍客・アメリカコハクチョウ>

昭和62年、63年と連続して静内川河口に姿を見せ、昨年、渡来してきたものは、この2月9日現在も引き続きその元気な姿が確認されています。

※ 静内川での観察データ(毛利守氏・浜田良平氏協力)

○昭和62年11月6日、11月24日～25日

○昭和63年11月4日、11月29日～30日、12月4日～7日、

12月23日～平成元年3月4日

●二十間道路

鳥獣保護区域の新冠種畜場敷地にまたがるこの道路は、延長8キロ、幅36メートルの道路両端に約1万本の桜が並び日本一の桜並木として呼ばれ、61年には「日本の道100選」にも選定されています。

樹種は桜がエゾヤマザクラが中心で、その他ヨーロッパトウヒなどの針葉樹も少なくありません。

原野、農地、森林、山など水辺の鳥を除く、多くの種が生息していますが、周年を問わず姿を見せてくれるのが、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラなどのキツツキ科で桜の樹などに営巣し、一年中、木をつつく音が絶えることはありません。

珍しいのでは夏のアカショウビンと冬のホシガラス、そして多くのエゾリスです。美しい自然と数多くの野鳥たちとの出会いが楽しめる、とても魅力的なフィールドです。

●静内町の野鳥活動

豊かな自然、数多くの野鳥たちに囲まれながらも、愛好者が数少なく、指導者も不足しており、組織も設立されていないというのが現状ですが、ここ数年、何人かの人たちが独自の活動を続け、また最近それらの人たちがそれぞれ、その存在を知るに至り、わが町にもようやく「野鳥」という言葉が市民権を得るようになった気がします。

その一つが1月15日、全国一斉に行われるガン・カモ・ハクチョウ類調査で、春田清美さんが音頭をとり、沙流川(門別町)、新冠川(新得町)、静内川(静内町)、元浦川・日高幌別川(浦河町)、えりも海岸(えりも町)をポイントに、日高地方に於き初めての調査が今年初めて実施されました。

ここに日頃、観察や給餌活動を通じて野鳥保護のためにがんばっている町内の愛鳥家を紹介します。

●高木 知さん(64歳)

4年程前から真歌公園、うぐいすの森、静内川河口で毎日欠かさず観察を続けています。これといった正確な記録がなかった静内に、初めて観察記録らしいものを作ったのが高木さんです。日頃の熱心な探鳥活動には頭が下がる思いがします。



アメリカコハクチョウとコハクチョウ

●毛利 守さん(71歳)

静内川に渡来するハクチョウのカウントを5年前から1日も休まず続け、3年前からは町から依頼され、パンクズの給餌活動もするなど、マチの白鳥おじさんとして活動を続けています。

●浜田良平さん(64歳)

日本野鳥の会の定点リポーターとして、静内川をフィールドとして観察活動を毎日続け、アメリカコハクチョウなど、貴重なデータを残しています。

●行方正雄さん(65歳)

町内の鳥獣関係の生字引と呼ばれる人で、とくにヒグマの生態と北海道犬の保護については、道内にもその名が知られています。どこの山や川にはどのような鳥獣が生息しているかを知り尽くしている人、町の鳥獣保護員、自然保護監視員も務めている。

●私と野鳥

愛らしい野鳥と出会うきっかけは、昭和59年の春、突然やってきました。昭和60年9月にオープンする町の保健保安林・うぐいすの森のパンフレットを一切、任せるから作れ——との依頼でした。

うぐいすの森という位ですから、当然、野鳥の写真が入らなければなりません。早速、工事中のうぐいすの森へ撮影に出向き、たまたま、運良くキセキレイ1羽を撮影できたものですから、これは面白いと始めました。

しかし、野鳥の生態どころか、夏鳥、冬鳥などの存在も知らず、夏の暑い日にオジロワシだとかトビを撮りまくっていたという、笑うに笑えないようなレベルからスタートしましたので、それからの一年間は、どのようなことになったのか想像がつくところです。

結局パンフレットには、オジロワシ、キセキレイ、オオハクチョウなど11種の写真を入れることが出来ました。

以後、人がやっていない事をやろうという、自分の性格にあったのか、野鳥の写真撮影に暇をみつけては出かけることになっていきました。

始めた頃のターゲットは、オジロワシとオオワシ。いずれも初めて撮影に成功した時の感動は、言葉に言い表



給餌風景



オジロワシ

せないほどうれしいものでした。とくにオオワシは静内川にたまに姿を現わす位の数しかなく、三脚とカメラを担ぎ雪野原を歩き回り、その雄姿を双眼鏡で見ても感激……。次に「逃げるなよ、逃げるなよ」と心に念じ、一步一步オオワシに近づきますが、心臓はもうドキドキの最高潮。寒さに震えながら、かじかんだ手に息を吹きかけシャッターに手が――。

そして、ついにやったと書きたいのですが、天は試練をまだ与え続けます。64というフィルム感度、うす暗く暮れかけた夕やみ、そしてF8というレンズ絞りの条件がそろえば、当然シャッター速度は1/8～1/15あたりを行ったり来たり、500ミリの望遠ではシャッターを指で押すことはできません。レリーズはないので、セルフタイマーを使いなんとかシャッターを切ることができました。しかし、ファインダーをのぞくことができないため、果してどのように写っているのか分かりません――一週間後、リハーサルを1コマ、1コマ、恐る恐る見た結果「やった!」と思われるのが2コマ、かくして、オオワシとの戦いの第1ラウンドが終了しました。

それからカワセミ、アカショウビン、クマガラをターゲットにしていますが、撮影できたのはカワセミだけで相変わらず、野鳥撮影の難しさを痛感しています。

しかし、昨年10月29日の胆振管内鶴川町の鶴川河口で運良く、コウノトリの番(つがい)の撮影に成功し、新聞

各紙で報道されたことは、一生の思い出であり、ともすれば、ほかの被写体に目が移りかけていた矢先のことだけに、これでいよいよ野鳥とは縁が切れなくなったなど、自分で痛感した次第です。

また、町広報紙の「広報しずない」に、昭和60年11月号から“しずないの野鳥たち”と題し、毎月写真入りで野鳥を紹介、現在、34回を数え、今ではこのコーナーを楽しみにしている人も増え、少しでも野鳥に対する関心を強め、愛好者人口の底辺拡大にお役に立てればと願いながら毎月編集しています。

●おわりに

自分が野鳥に興味をもち、その視野が広がっていくたびに痛感したのが、日高(静内町)の野鳥に関するデータがないということでした。

はたしてどんな所にどんな鳥がいるのか?。春には、秋には……。幸い、静内の愛鳥家のみなさんが、毎日、自分の足と目で根気強く観察を続けた結果、貴重なデータが成果表として出来上がりました。

ここに掲載するにあたり、心よいご返事をいただきました。おおよそ、この種のデータが日高地方から発表されることは、今までなかったろうと思います。日高の野鳥の生態の一部として、今度、このような形で発表されることをとてもうれしく思います。

別表1

静内町の鳥獣保護区

名称	真 歌	新冠種畜牧場	春 別
所在地	静内町真歌	静内町字御園	静内町字高見
位置	市街地に隣接	市街地から12 Km	市街地から30 Km (日高山脈山麓)
指定面積	516 ha	1,713 ha	2,322 ha
存続期間	昭和60年10月1日 平成16年9月30日	昭和58年3月31日 平成14年3月30日	昭和59年10月1日 平成15年9月30日
備 考	○第1回目の指定は、 昭和40年10月1日～ 60年9月30日まで。	○昭和63年9月19日付 で、北大農学部実験 農場敷地を追加して 指定。	○場所は、日高山脈の 山麓で、国有林敷地。

静内川とその周辺で見た野鳥

観察者：浜田良平

目	科	類	(昭和63年1月～12月)
③コウノトリ	サギ	サギ	コサギ、チュウサギ、アオサギ。
④ガン、カモ	ガン、カモ	ハクチョウ	オオハクチョウ、コハクチョウ、アメリカコハクチョウ
		淡水ガモ	マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、コガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、オンドリ、オカヨシガモ
		海ガモ	ホオジロガモ、ヒメハジロ、スズガモ、クロガモ、ホンハジロ、シノリガモ。
		アイサ	ウミアイサ、カワアイサ。
⑤ワシ、タカ	ワシ、タカ	ワシ、タカ	ミサゴ、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、ハイロチュウヒ。
ワシ、タカ	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ。
⑥ツル	クイナ	クイナ	バン。
⑦チドリ	カモメ	カモメ	オオセグロカモメ、セグロカモメ、ウミネコ、カモメ、ユリカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ミツコビカモメ。
⑧チドリ	チドリ	チドリ	イカルチドリ、シロチドリ、コチドリ。
	シギ	シギ	トウネン、ウズラシギ、ハマシギ、アオシギ、クサシギ、イソシギ、ダイシャクシギ、タンシギ。
⑨ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	カワセミ
⑩スズメ	ヒバリ	ヒバリ	ヒバリ
	ツバメ	ツバメ	ツバメ、ショウドウツバメ。
	セキレイ	セキレイ	キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ。
		タヒバリ	タヒバリ
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	ヒヨドリ
	モズ	モズ	モズ。
	ミソサザイ	ミソサザイ	ミソサザイ
	ヒタキ	大形ツグミ	ツグミ。
		小形ツグミ	ノビタキ
		ウグイス	ウグイス、オオヨシキリ、コヨシキリ。
	アトリ	アトリ	アトリ、マヒワ、カワラヒワ、ハギマシコ。
	シジュウカラ	カラ	シジュウカラ。
	ホオジロ	ホオジロ	ホオジロ、ホオアカ、オオジュリン、アオジ。
	カラス	カラス	ハシブトガラス、ハシボソガラス、ミヤマカケス
	ハタオリドリ	スズメ	スズメ。
	ムクドリ	ムクドリ	ムクドリ
①アビ	アビ	アビ	アビ
②カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ、ミミカイツブリ。

静内川河口でのオオハクチョウ観察記録

(データ提供: 毛利 守氏)

()内数字は幼鳥で各数値に含める

月	確認数	昭和59~60	昭和60~61	昭和61~62	昭和62~63	昭和63年~ 平成元年	集 計 (S60~)	備 考
10	最大数		2	14	4	11 (3)	14 (3)	
	最小数		2	4	1	2 (3)	1 (3)	
	月平均		0.06	1.2	0.5	2.7 (0.6)	1.1 (0.6)	
11	最大数		12	14	17	39 (14)	39 (14)	
	最小数		2	5	3	5 (2)	2 (2)	
	月平均		0.6	6.8	5.3	20.6(6.4)	8.7 (6.4)	
12	最大数		52	44	71	67 (11)	71 (11)	
	最小数		5	8	12	22 (7)	5 (7)	
	月平均		8.4	27.9	39.8	37.0(7.7)	28.5(7.7)	
1	最大数	56	51	70	73	72 (13)	73 (13)	
	最小数	24	47	47	63	65 (10)	47 (10)	
	月平均	4.4	0.2	43.0	69.4	68.9(10.5)	47.3(10.5)	
2	最大数		52	67	78		78	
	最小数		52	63	70		52	
	月平均		1.8	65.6	75.5		48.5	
3	最大数	60	64	70	93		93	
	最小数	42	9	2	14		2	
	月平均	8.0	13.6	41.4	60.5		38.5	
4	最大数	44	27	60	34		60	
	最小数	5	1	27	2		1	
	月平均	1.9	3.1	5.0	5.1		4.4	
年 間	最大数	60	64	70	98	72 (14)	98 (14)	
	最小数	5	1	2	1	2 (2)	1 (2)	
	月平均	—	4.8	26.7	36.8	32.8(6.4)	24.5(6.4)	
備 考	初飛来	59.11.20	60.10.22	61.10.19	62.10.24	63.10.23	—	
	飛び去った日	60.4.7	1羽が秋まで生息	62.4.5	63.4.12	—	—	

〒056 北海道静内郡静内町こうせい町2丁目5-16

沖縄の探鳥旅行

矢野 玲子

1月9日の昼過ぎ、沖縄探鳥ツアーの一行21人は那覇空港に下り立った。6日間のヤンバル、石垣島、西表島の探鳥が始まるのだ。薄曇りではあるがムッとする気温と色彩の強さに戸惑いを覚える。ツアーのメンバーはわがカワセミを含めて各区の探鳥サークルの仲間が殆どである。その中にこの道の大先輩山田良造氏のお顔も見え、世話役のわが会指導者島田明英先生と共に力強い存在である。私達夫婦は沖縄は2度目で、昨年観光ツアーで来ている。観光の合間にプロミナを持ってあちこち回ったが、ビギナーの悲しさでシロハラクイナ・ズグロミゾゴイを見逃して帰った。しかもヤンバルには行っていない。そんなこんなで再度挑戦。今度こそは心残りのないよう頑張るつもりだ。

バスに乗り守礼の門と東南植物楽園を見学して宿泊地オクマに着く。今日の私は真っ盛りのヒカン桜に群がるメジロを見ただけに、オオヨシキリを見た人、パンやダイサギを見た人とさまざまだ。

1月10日 西銘岳と漫湖

まだ明けやらぬ7時西銘岳へ出発。第一目的はノグチゲラ。辺野喜から6km登った所で車を下りる。もう陽はかなり上っていて今日も暑くなりそうであった。暫く歩いたのにヒヨドリとカラスバトが横切っただけ。突然アカヒゲの鳴き声がする。コマドリより柔く優しい。声の方へ目を凝らす姿は全く無理。ノグチゲラを探すこと1時間。坂の下で山田氏が手招きしている。「さては？」300mを一気に下る。太いイタジイに小さな鳥が群れていて道を隔てたもう1本のイタジイとの間を往ったり来たりしている。ヤマガラ・シジュウカラ・サンショウクイそれにコゲラも。大きくて黒いのが動いた。背は赤紫。ノグチゲラだ！道の上をゆっくり飛び奥の細い木について裏側に回った。陽に当たって赤紫が美しかった。うれしいのに言葉にならない。急にお腹が空いてきて朝食のサンドイッチを口に入れる、美味しいのかまずいのか分らなかった。帰路の車上ウォッチングもまた楽しかった。海岸の道端にイソヒヨドリ、電線にカラスバトやサンショウクイ、空にはサシバ・ミサゴなど何回も車を止めて探鳥した。

午後那覇空港近くの漫湖に行く。ここは50haの広い干潟ができ水鳥の越冬地になっている。見渡す限り鳥で

シギチの多いこと。ムナグロやハマシギの中にダイシャクシギ、嘴を泥の中に入れて歩きながら餌を探るカモ達の中にツクシガモ、ユリカモメの中にズグロカモメと北海道ではめったに見られぬ鳥がいて、みんなを喜ばせた。

1月11日 石垣島

上空から眺めた石垣島はエメラルドグリーンの海に囲まれた美しい島だ。まず白保海岸で探鳥である。電線にズアカアオバト3羽、アオバトに似るが全体がまだ緑ばい。海辺にはソリハシギ・クロサギがポツンポツンといてその間をキョウジョシギの小群が舞っていた。海岸林に小さな貯め池があってムラサキサギ・ズグロミゾゴイ・クイナがいたのに私たちが近づいたら逃げてしまった。午後はアンパルの予定だが干潮に少し間があるためキンバトの竹島農園にお邪魔する。1時間以上待ったが駄目であった。

石垣には越冬のサシバが多い。原野の棒の先に電柱にどこにでもいる。それに水牛の周りのアマサギ。彼等は冬羽の真白な姿で広い草原に彩りを添えていた。

アンパルは沖縄第一の探鳥地といわれている割には種類も数も少なくながっかりした。クロサギの白型と黒型がいた位で私達は僅かなシギチを1羽1羽でいねいに観察した。

1月12日 西表島の浦内川と星立・粗納

朝から雨。朝食前ホテルの裏で探鳥。新川川の土手にツメナガセキレイがいる。セッカも。電線にシロガシラが並んでいた。

石垣港から西表島へ移動。浦内川を観光船に乗って軍艦岩迄行く、雨足はだんだん強くなり水しぶきと雨が容赦なく降りそそぐ。とても寒い。本来なら西表探鳥のハイライトの筈なのにマングローブの間に鳥影はなかった。マリウドの滝の展望台まで歩いてもただ濡れただけだった。午後、星立と粗納で探鳥。星立は赤瓦葺きの木造家屋が多くそれが鬱蒼とした屋敷林に囲まれていて古い西表の姿を留めている所である。ズグロミゾゴイが忍び足で歩いているのを見つけてみんなびっくり。逃げも隠れもしないので心ゆく迄見ることができた。粗納の水田にタゲリが十数羽いる。幅広い羽でフワッと飛ぶ姿や黒い冠羽をゆらせて餌を探っている姿をしっかりと見る。その昔札幌で1羽のタゲリを追いかけたことを思い出した。

1月13日 西表島大原

今日も雨。大原へ。古見の山林沿いでバスは急停止。「そこにカンムリワシがいるよ」と運転手さん。車中から一斉にウォッチング。全体に白っぽいので若鳥とみる。後頭に白と黒の冠羽状の羽毛も見えた。バスはまた止まる。もう一度カンムリワシだ。2回の観察でみんな満足。午前はムラサキサギを見るため豊原へ。サトウキビ畑と原野の道をずいぶん歩いたが目指すものはいなかった。午後からは亜熱帯林観察路見学。メジロにヒヨドリ・キジバトの常連さんしか現れなかった。ヒヨドリといえはここのは道産子より色黒で褐色味が強い。

1月14日今日でこの旅は終りなのだ。シロハラクイナをまだ見ていない。朝1時間探鳥可能だ。薄暗い外はまたまた雨。よい場所を知らないので犬棒式に林らしい所を目指す。バサッと頭上の枝から大きいのが飛ぶ。サシバかな。よく見ると前方の木にカンムリワシ。道は学校の実験水田に出る。用水路の中に鳥がいる。クイナだ。シロハラクイナだ。もう1羽。これもシロハラクイナだ。とうとう会えたのだ。もう心残りはない。

8時25分西表島を去る。風速14mものすごい波であっ



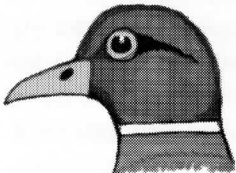

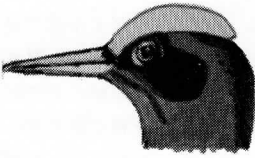
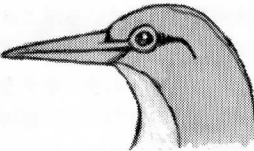
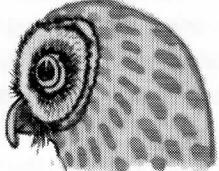
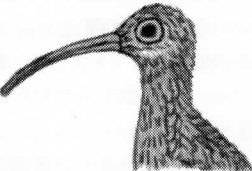
た。

〔見た鳥〕オオヨシゴイ、リュウキュウヨシゴイ、ズグロミゾゴイ、アマサギ、ダイサギ、コサギ、クロサギ(白型・黒型)、アオサギ、ムラサキサギ、ツクシガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ミサゴ、サシバ、カンムリワシ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、クイナ、シロハラクイナ、バン、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、タゲリ、キョウジョシギ、トウネン、ハマシギ、アオアシシギ、キアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、チュウシャクシギ、タシギ、ユリカモメ、ズグロカモメ、カラスバト、キジバト、ズアカアオバト、ノグチゲラ、コゲラ、リュウキュウツバメ、ツメナガセキレイ、キセキレイ、ハクセキレイ、ビンズイ、サンショウクイ、シロガシラ、ヒヨドリ、モズアカヒゲ、イソヒヨドリ、アカハラ、シロハラ、ツグミウグイス、オオヨシキリ、セッカ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、スズメ、ハシブトガラス、ドバト、アミハラ(帰化鳥)

〒001 札幌市北区屯田3条1丁目5-1

野鳥のくちばし
佐藤 勇

鳥のくちばしは、人間の手と同じ働きをしてしたがって、鳥の種類や習性の違いによって、それぞれの生活にもっとも、ふさわしい形になっている。歯をもたず、上くちばしの根元は、やわらかい膜に包まれ鼻孔があいています。

<p>スズメ</p> <p>食物をついばんだりかたい物をつつき、くだくのに便利です</p> 	<p>ムクドリ</p> <p>小さな虫をとって食べるのに便利です</p> 	<p>マガモ</p> <p>水面でえさをあさることがあるのでくしの歯の様な口ばしです</p> 	<p>イスカ</p> <p>くちばしがくちがいになっていて木の実を食べやすいよう便利です</p> 
<p>クマゲラ</p> <p>木に穴をあけるきりのようにとがったくちばしです</p> 	<p>アカショビン</p> <p>小魚やサワガニをとらえる大きなくちばしです</p> 	<p>フクロウ</p> <p>かぎ形にまがったすどいくちばしです</p> 	<p>シギ</p> <p>やや湿った所や水の中でくちばしを差し込み探します</p> 

〒004 札幌市豊平区清田7条3丁目16-2

ブレゼブロ市街地の給餌台

齋藤 新一郎

このたび、機会があって、1月の中旬に、デンマーク国のユトランド半島南部を訪ね、森林、防風林、生垣、街路樹などの環境林関係を見学してきた。その折、ブレゼブロ (Bredebro) の市街地において、バードテーブルを数多く見かけたので、その一端を紹介したい。

真冬にもかかわらず、北緯 55 度であるにもかかわらず、積雪がなく、常緑性のキヅタ (アイヴィ) が赤煉瓦壁をはい、マンサクが黄花を咲かせていた。この年は暖冬というが、冬のこの温さは、大西洋を北上するメキシコ湾流の熱と、それを運ぶ偏西風とによってもたらされている。太陽が低く、日照時間が6時間ほどで、しかも曇天が多いのであるから (冬に雨が多い)。

バードテーブルの多くは、杭や柱の上に取付けられ、板張りの巣箱に近い型か、小柱と屋根だけのやぐら型かであった。

これらは、一般に、台所の窓から見える場所に設置されていた。そして、餌としては、パン屑 (トースト用のパンでなく、ライ麦などの粒入りパン、せんべい状のパン)、麦粒、チーズ片、骨肉 (小豚の頭骨もあった) などが見られた。

冬とはいえ、寒さが弱く、街中に樹木が多く、生垣が連続しているので、小鳥の姿は多かった。

〒079-01 美咲市峰延町本町北2



写真-1 巣箱型の給餌台 (ブレゼブロ)

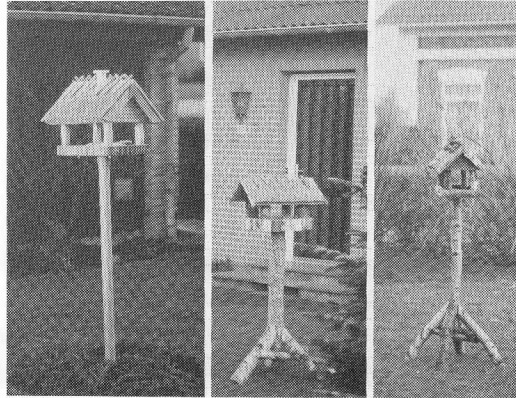


写真-2 やぐら型の給餌台 (ブレゼブロ)

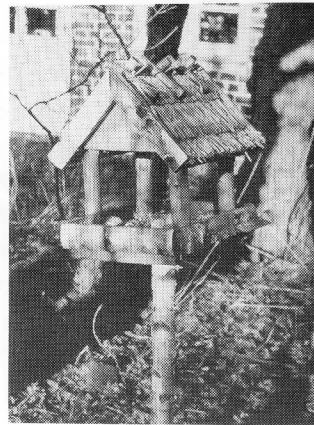


写真-3 イエスベアセン家の給餌台 (ラナルプ, 1989.1.13)

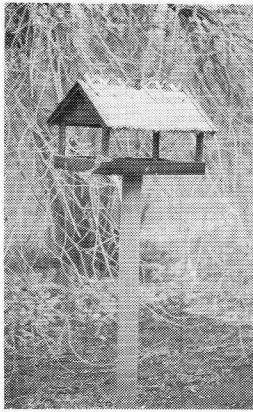


写真-4 植物園の給餌台(コペンハーゲン)

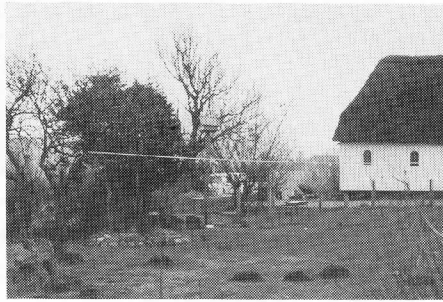


写真-5 農家の庭の給餌台(ミョウルデン)

冬鳥の話題

今年の此れ程の暖冬少雪を予想した人は果して何人居たのだろうか。此の異常気象と冬鳥の関係は兎も角、愛鳥家の関心を集め、話題となった事柄を記してみたいと思う。

[キレンジャクの当り年]

今年の冬鳥の話題の始まりはキレンジャクではなかろうか。何年周期説の在るキレンジャクではあるが、今冬は11月初中旬頃から姿を見せ始め(ヒレンジャクも混って)街路樹・公園・林・庭先のナナカマドの実を食べ群れを成して飛び回り、電線・アンテナ・枝木等に留って居る処を良く見かけた。全体が赤みがかった灰褐色・尾羽根の先が黄色、大きめの冠羽が特徴のムクドリ程の大きさの仲々の人気鳥。1月も中下旬になると、樹の実を食べつくしてしまい餌台に顔を見せる様になったが、ひと頃程の数は見られなくなった。

[今年も来たコケワタガモ]

一昨年12月から昨年1月迄、初めてえりも岬に約1ヶ月半の滞在記録を残して話題になったコケワタガモが、昨年11月30日同じえりも岬での成鳥1羽も、昨年の第一発見者である大野信明氏に依って確認された。其の後数次に亘り会員等に依って観察が続けられ、最少♂1羽、最多で♂2羽♀4羽が確認され2月12日♂2羽♀4羽が観察された後2月14.19.20.26日にも出向いたが認められない。既報(野鳥だより第71号)の通り、此れ迄の記録に依ると、根室半島付近以外での記録は少く、複数での

長期滞在の南限が根室半島の周辺と考えられていたが、昨年のえりも岬での記録により複数の長期滞在の南限が書き替えられ俄かに注目されていた。昨年に引続いて再びえりも岬に複数での長期滞在が確認され、今冬は75日と昨年より更に長い滞在記録となり今後の渡来と併せて継続性が注目される処である。

[コウミスズメのご難]

12月15、16日日本海側で発達した低気圧が、全道に暴風雪を携らし札幌と周辺地域で多数のコウミスズメが保護されると云う珍しい出来事がテレビや新聞で報じられたのをご記憶の方も多と思います。

コウミスズメは、海岸から離れた海上で生活するため、観察のチャンスが極めて少い冬鳥で、群れで移動中強風に吹き飛ばされ陸地に着いたものと思われます。コウミスズメはウミスズメ類中最小で体長15cm雌雄同色・夏羽は頭部全体から上面上尾筒まで青灰黒色、頭額、眼の周りに細長く白い飾羽がある。嘴は短小暗赤褐色・先端が赤・冬羽は嘴上部の突起・頭部の飾羽・嘴先端の赤を欠き・喉から下面は白・肩羽は細長く白い・幼鳥は肩羽の灰白色の斑がない。海洋性の海鳥で冬期は海上で群れ、小型の無脊椎動物や端脚類を水面及び潜水採餌を行う。アリュウジャン・アラスカ・カムチャッカ・ベーリング海・千島等の没岸の岩棚・崖に集団営巣1腹1卵を産む。北海道・本州北部の海上に渡来・東京都・福岡県・鹿児島県・種子島にも渡来記録がある。

[室蘭でケアシノスリを観察]

12月23日には室蘭に於てケアシノスリを会員の福岡研也氏に依って観察されている。同氏の話に依ると室蘭でのケアシノスリの観察は昭和57年以来7年振りとの事、此の情報に基いて会員等が数回に亘り観察に向き2月11日迄確認されている。日本では冬期に数少ない冬鳥として現れ本道から南部流球まで渡来記録があり、北日本や日本海側に比較的が多い。海岸・原野・農耕地・干拓地等に棲み樹上より岩の上・堆土に好んで留る。

全長55cmトビより少し小型・翼は幅広く、尾は短くて丸い・背・翼の上面は黒褐色で淡褐色の羽縁があり・頭・腹部・翼の下面は灰褐色でノスリより白っぽい。頭や胸に黒褐色の縦斑があり腹や脇の斑は大きい。尾は灰白色で先端の黒褐色の帯が特徴で一見するとノスリに比べ灰白灰と黒褐色のコントラストが鮮明である。

カナダ中北部・アラスカ・カムチャッカ半島・ユーラシア大陸極北部の平坦なツンドラの地上や低木に営巣することもあるが、普通岩の窪みや岩棚に営巣する。巢は枝を積み重ね可成り大きく産座には松葉や草を敷く。卵は5～6個抱卵日数は28～31日で孵化後41日で巣立つ。

冬期はユーラシア大陸中央・ヨーロッパ南部に移動越冬する。尚今冬は各地でノスリ・ケアシノスリが多く見られたようだ。

[保護されたシロフクロウ]

北極圏で繁殖の後ユーラシア大陸、北アメリカに南下越冬する珍しいシロフクロウが年明早々の1月2日早朝江別市八幡の篠津運河付近の雪上で保護されたと4日の新聞が伝えました。右の羽根に怪我をしたのが原因で保護された様で、幸い近くの会員でもあり日本野鳥の会江別支部理事で北大獣医学部大学院生武田忠義さん宅で手厚い治療を受け回復に向っている由です。話は2日溯り12月31日午後3時15分頃、岩見沢市内を自動車で行中、約30米程離れた水田の雪原の中の堆積物で盛り上った雪の小山の上に黒斑の付いた丸い物体を山田隆志さん(岩見沢市上幌向)が発見、直ぐ自動車を駐め運転中の山下肇さん(岩見沢市美園)と2人で良く見ると姿、形、白く大きな体に黒い斑点がある等から迷わずシロフクロウと判りました。

少し観察、写真を撮った後、動く様子がないので近くの会員船造淳一さんに報せ、夕暮れの暗い中を江別方面へ飛び去る迄観察しました。翌日は明けて元旦、そんなに遠くへは行く筈がないと3人で飛び去った方向を重点に、付近一帯を、後日も又再度探し回りましたが再び見付ける事は出来ず何処へ行ったのだろうと話合っ居た処1月4日の朝刊を見て咄嗟にあの時ではと………最後に江別方面に飛び去った処から保護された場所迄、直線にして約20km、時間差が約38時間半、同じメスであ



シロフクロウ 撮影 山田 隆志

ること渡来数が極めて少く同一地域に同時に複数の渡来が在ったと仮定しても雪原や原野と云った比較的開けた環境で生活する習性と斯した異種に対して敏感に反応するカラスの集騒行動や白く大きいと云う珍しい形体から発見が比較的容易にも拘らず、其の後目撃情報が全く無い等の事情から保護されたのは山田さん等が観察したのと同一個体ではないかとの見方も成り立つのではないだろうか。シロフクロウは全長60cm、雄は殆ど白色・雌は白を基調に頭上と全体に黒い鱗状斑がある(雄は背面に僅か)眼は黄色、嘴は黒、脚指まで羽毛で覆われ羽角はない、北極圏で繁殖の後ユーラシア大陸、北アメリカ等に南下越冬する。単独で海岸原野に棲み、氷塊、岩、切株、杭等に留りネズミ・イタチ・カモ等を捕食する。フクロウの仲間の多くは夜行性であるが、本種は昼間にも活動する。ツンドラや草原の窪みを利用して営巣、純白の卵を4～10個産み32～34日で孵化、後51～57日で巣立つ。秋田、千葉、岐阜、石川、鳥取、広島各県にも渡来記録があり、本道では1977年7月大雪山で、1983～4年に道内各地で渡来の確認があった。

[迷鳥オオホシハジロの越冬]

1月19日カラー写真で新聞で紹介され俄に話題となったオオホシハジロは、札幌市北区の会員泉勝統氏が昨年11月9日創成川畔から茨戸周辺を探鳥中に発見したのが初認である様に思われる。同氏に依ると健康管理の一環として創成・茨戸・石狩川流域福移方面へ探鳥を主にした自然観察に、週2～3回、時には毎日出掛け欠かさず記録を残して居る由、初めてオオホシハジロを見たのが、茨戸湖の漕艇場入口左側スタンド近くで、ヒドリガモ42羽の集団から20米程離れている見馴れない1羽を見て変わったのが居るなあーと気付き腹這いになり出来る丈近付き図鑑と照合し乍ら観察した。其の時はホシハジロかオオホシハジロかの何れであろうと思ったが、何れも見た経験もなし特定する自信もなく体が白っぽかったので取敢えずシロホシさんと名付けて帰った。しかし此のシロホシさんの印象が非常に強くシロホシサンに会えるのが励みにもなって茨戸通いが続いた。11月18日から19日にか

けて漕艇場付近も結氷、残された開水面にホシハジロの♂2♀2を初めて見てオオホシハジロとの違いも解り益々確信が深まった。12月15日にはホシハジロとオオホシハジロの♂同志が行動を共にして居る処を比較観察することが出来愈々オオホシハジロである確信を持った。度重なる観察を続けて居る中に、♀同志の違いも明瞭になりオオホシハジロは♂1♀1である事も判り共に行動する時と別々になって、或いはホシハジロと一緒に行動して居る時等様々である。此のオオホシハジロに就いて一部の鳥仲間にも年賀状で報告して居る。1月9日には其れ迄開水面であった下流域も石狩高校付近迄結氷、押し出される様にカワアイサの集団が此の辺りに陣取った。

此の頃から結氷に依り開水面が狭くなり観察が仕易くなり良く人目に付く様になった。1月下旬になり暖冬続きに氷が融け始め開水面が広がるに連れ行動範囲も広くなり見かけるチャンスも少なくなったが、其の後も週2〜3回の観察は続いたが3月3日、茨戸遊園地付近での観察を最後に其の姿は見れなくなった。(泉氏)

オオホシハジロは稀な迷鳥で、全長55cm・雄は頭部・頸部が赤褐色で前顔は濃く暗赤褐色・頸は太く長い。前顔から続いた流線形の嘴は長く黒く独特の顔付・胸は黒く上背面は灰白色上下尾筒は黒く背面と側面とははっきり境目が付いている。背面下面とも淡い波状の細斑があるが殆ど白色に見える。脚は暗灰色、雌は頭・頸・上胸まで褐色・体は全体に褐色、アラスカ内陸からカナダ・北アメリカの中西部の広い淡水湖沼の「スゲ」や「マコモ」の繁る処に生息し巢もその中に造る。7〜10個を産卵・抱卵日数は23〜29日餌は植物質が80%以上占める。

アメリカ西部と東南部・メキシコに移動越冬する。日本では栃木・茨城・長野・愛知・香川の各県と道内では標津・厚岸等過去5回の記録があり、1984年4月紋別市コムケ湖の記録が新しい。



ホシハジロとオオホシハジロ
撮影 山田 良造

[珍鳥ハシジロアビの観察]

昨年に続いて今年も又えりも岬にコケワタガモが来て居ると聞いて今年も是非行って見度いと会員の矢野さんは、羽田さんに案内をお願いしてお互の都合を見計らい

乍ら毎日の天気予報を気がかりに其の日を楽しみに待って居た。愈々1月30日に行く事が決った。1月15、16日に会友が観察して以来其の後の様子が分らない。果してコケワタガモは居るのだろうか。そんな不安を抱き乍ら2人は札幌からバスに乗り浦河・様似と乗り継いでえりも岬へ向った。此の日と決めたのが幸いして天気は晴れ、期待のコケワタガモも♂2羽♀4羽を比較的近い距離から観察、2年越しの念願を果して満足感に浸り乍らえりもユースホテルに一泊、翌朝再びコケワタガモを観察した後、えりも漁港を見回り更に海岸を北へ歩き乍ら沖合を探鳥、快晴無風穏やかな海に季節外れの温暖に1枚脱ぎ度くなる程、何処から百人浜と呼ばれるのでしょうか。砂浜の海岸の沖にはクロガモ、ビロードキンクロが群れシノリガモ・ホオジロガモ、コオリガモ、ヒメウ等が点々と潜水を繰り返して乍ら浮んで居た。浮き翔んで居るカモメ類の中にワシカモメが割合多く見られる。遙か沖合をプロミナで見ていると、クロガモの群れの近くにアビらしいのが見付った。20倍のレンズでははっきりしないので40倍のレンズに取換え覗いて見た。近くのコロガモの大きさと比較してアビより目立って大型だ、全体が灰褐色首も太く感じる。嘴も太く大きく上にそって白っぽい。前頸・胸部・顔もぼけた灰白色である。2人は替々る覗き合った。此れは羽田さんが小樽市朝里で、昭和51年12月には溝部さんと2回、昭和54年11月と翌年2月には北尾さんと一緒に見た事のある日本付近に来るアビ類の中では最も大きい観察の機会が極く稀なハシジロアビであることが分った。少し遠いのを除けば海は穏やか快晴無風と恵まれ過ぎる位の好条件が重って思いもかけない珍鳥のプレゼントに充実感を味わい乍ら帰りのバスに乗り込んだ。ハシジロアビは、カナダ・アラスカ・ユーラシア大陸・北欧の北極圏沿岸のツンドラ地帯の草中に簡単な巣を造り繁殖する。冬期もあまり南下せず少数が本道・三陸沿岸の河口・港湾付近等比較的近海に現れる。魚の外、底棲カニ類も食べる。

[冬の美唄にコノハズク]

声の仏法僧として其の神秘的な鳴き声で識られているコノハズクが2月6日朝美唄市東3条北1丁目左官業近野進さん(52)宅のトイレの排気筒の上に居るのを向いの土肥哲昭さんが見付け近野さんへ報せた。市役所職員である土肥さんは出勤後、此の事を市広報係に伝えた。広報係は早速写真を撮ると共に道立林業試験場自然保護科の鈴木悌司さんに鑑定して貰ったところ胸の縞模様や角羽等があることからコノハズクと分った。動物好きの近野さんが弱って居る様子なので肉でも与えてみようとして2階の窓から手を出すと逃げてしまったが間もなく同じ場所に舞い戻って来た。此の噂を聞いた人達や新聞記者等が見物や取材に来る等したが時折細目を開ける事で身動

きひとつしないのでうづくまって居たが夕方には姿が見えなくなった。翌7日朝近くの同市東2条北1丁目中谷そわさんは自宅の前に死んでいるフクロウらしきものを見付け拾い上げ、どうしたものかと思案して居た処、偶々近所の青果店主沼沢康夫さんに会い此の事を話した処昨日の近野さんの処に居た鳥ではないかと云う事になり死体を預って行った。沼沢さんは此れを早速近野さんへ届けた。近野さんは此の事を土肥さんへ土肥さんは市の広報係へ更に地元の鳥獣保護委員の坂本憲市さんへと伝った。8日連絡を受けた坂本さんは預って居た近野さんから引き取り調査確認した後坂本さん宅の庭の一角に埋葬した。坂本さんの調べに依るとコノハズクの成鳥♂♀不明、外傷、骨折・脱羽等は認められず、瘦衰状態で胃の内容物は空、病気に依るものか不明、空腹のため全身衰弱に依る餓死だろうということになりました。本道には5月頃渡来、平地や低山帯の森や林を生活の場として、昆虫や小動物を捕食・繁殖した後秋には南下・関東以南の温暖な地で冬を過ごす。

何故此の時期に現れたのかは不明であるが、暖冬のため、渡りの時期を過ぎたものか、病気や怪我などで居残り、暖冬少雪が幸いして生き延びて居たが、次第に餌が乏しくなり住宅地に迷い込んだもの等と推測の域を出ません。尚此れとは別に1月31日千歳でも1羽保護されていることから少くとも2羽は冬を過ぎて居た事になり、何れも珍しい記録である事に間違いはない。

〔春国袋でハマヒバリを観察〕

日本産ヒバリ5種の中の1種で、日本では過去数例の記録が残されている丈の迷鳥、ハマヒバリ2羽が根室市春国袋で観察された。昭和63年12月30日、千葉県市川市在住の英語教師リチャード・クロスビーさん(英)が旅行中に発見したもので、同夕根室市東梅の民宿経営松尾武芳さんに宿泊した際に明らかになったものです。

リチャード・クロスビーさんはイギリス人で現在市川市で英語教師をしているが世界各国を巡り自然観察をしながらの旅行に良く出掛けると言う。リチャードさんの観察したハマヒバリは外国では普通に見られているので特別の関心があった訳ではなく、今日こんな種類が見られたと言う話の中から出た事で、日本では珍鳥であることに驚いた位だとの事。其の後松尾さん自身はもとより、ウォッチングや写真を目的に来られた宿泊客の方々にも此の情報を伝え、多くの人達が観察して行ったが2月に入ってからは何処へ行ってしまったのか見る事は出来なくなりました。ハマヒバリは展望台近くの短い草が疎らに生え、標着物が散乱した砂地状の処にハギマシコの群れと一緒に居た事もあり、警戒心が強く人が近付く気配を感じたり、ハギマシコが飛び立つと一緒に舞い上り此れ等の群れから離れて見えなくなってしまうが、い

つの間にか再び同じ様な場所に戻って来ると言う事の繰り返しであった。飛んでいるのを見上げると下面、翼下は白っぽく、胸の黒い帯と尾羽根の基部、脚が黒褐色に見えヒバリの飛翔に似ている。1羽は角状の尖った黒い冠羽が見られ顔の黄色も割合明瞭で、目先から目の下、頬に下る黒く太い線、胸の黒い帯、黒い脚等♂の特徴が割合明瞭に感じる等から雄の成鳥であろうと思われる。

他の1羽に就いては雌雄成鳥若鳥等不明で鳴き声はチッチ・チッチ・ジューと言う風に聴き取れた。

稀れな迷鳥として現れ全長約16cm雌雄ほぼ同色、翼と尾を含め上面は褐色で黒褐色の斑がある。尾羽根の外弁は白く黄色い顔に黒い角状の冠羽があり、目先から頸側に太く黒い帯があり、胸にも黒く太い横帯のあるのが特徴、嘴は灰黒色、足は黒い、雌は顔の黄色や胸の黒帯が淡い。

分布：約40亜種に分けられる。ユーラシア大陸の極北圏、アフリカ北部からアラビア半島、パミール高原、ヒマラヤ、モンゴル高原、北アメリカ全土に繁殖、北地のもは南下越冬する。日本に渡来する亜種は、極北圏で繁殖したものが南へ渡り其の一部のものが渡来するらしい。

生態：夏乾燥した地帯で繁殖し、北地のもは南下して山岳地や海浜の砂地等で生活する。地上で昆虫を採食するが秋冬には草の実が殆ど、日本では繁殖しない。岩陰やツンドラ、荒地の地上等に草の茎葉で皿形の巣を造り普通4箇の卵を産み雌が10~14日抱卵する。

習性：秋冬には海岸、河口、埋立地等の草の疎らに生えた乾燥した砂地状の場所に単独又は2~3羽で居ることが多く習性はヒバリに似て居る。繁殖期には飛び乍ら或いは石の上等で囀ったりする。地鳴きはタヒバリの様なヒツ又はチツと聴える。

記録：1977. 10 神奈川県相模川河口. 13日間滞在・1977. 11 静岡県. 石川県. 1977~1978にかけて千葉. 愛知. 石川県・1978. 1 千葉県・1979. 長野. 愛知. 滋賀県

〔オオホシハジロとヒメハジロ〕

渡りのコースから大きく外れていることから渡来の記録が極めて稀れなオオホシハジロ雄7羽と雌2羽とヒメハジロ雌2羽が同時に観察されたと言う珍しい出来事が十勝川河口大津漁港でありました。1月12日帯広市の青木則幸さん須田修さんの2人は、十勝川河口沿岸を探鳥中、大津漁港でオオホシハジロ雄7羽雌2羽が1群となって遊泳しているのを発見観察しました。翌13日再び此のオオホシハジロを観察に出掛けました処同じ漁港内で昨日のオオホシハジロの1群とは別にヒメハジロの雌2羽が遊泳して居るのを発見観察しました。其の後1月20日には北大生の林省二さんが同じ漁港内でヒメハジロの雌

2羽を観察しましたが此の時には前述のオオホシハジロは観察されず2月26日には帯広市の土田光子さんと井関さんの2人が同じ天津漁港内でオオホシハジロ10羽とヒメハジロ雌2羽を同時に観察しています。

此れ等の事から両種共天津漁港及び其の周辺地域に滞在して居たものと思われます。又両種はアラスカ、カナダ、北アメリカ等を繁殖地とし、南下してアメリカ東南、西部、メキシコ等を越冬地とすると言ふ略々共通した移動習性がある点等今回の同時観察に興味を添えるものになりました。ヒメハジロは全長35.5cm、小形の美しい(雄)カモ、本来は北アメリカの鳥で稀に迷鳥として現れる。雄は頭部の羽毛が豊かで球状に膨み、眼から後頭部へ白色が三角に拡がり左右から合する。前頭部と嘴の基部から後頭部、上背面は光沢のある青紫黒色、胸・脇腹・下部は白色、嘴は淡灰色、脚は淡桃色、雌は頭部が褐色で眼の後方から耳部に白色の帯があり、背は灰褐色、下面は白色だが脇は暗灰色にぼける。脚は淡灰色、嘴は暗灰色、内陸淡水の開けた河口、湖水面・内湾等に棲み魚、甲殻類、昆虫等を捕食する。

繁殖：アラスカ、カナダ東部の内陸の湖沼の水面近くの樹洞に営巢、前年の巢又は其の付近への帰巢性が強い。8~12個を産み抱卵日数は約30日、雌は雛の独立を待たず換羽のため去るらしい。

習性：冬期も内陸湖沼に留るがアラスカ南部からカナダ、アメリカ西部、南東部の水面で越冬する。冬期は内湾、河口、湖沼に棲み日本ではホオジロガモの群中に1羽いることが多い。習性はホオジロガモに似ている。

記録：1954~56 1963~65青森、岩手県。1960千葉県。1974根室。1981釧路。最も新しい記録では1988. 11~89. 2岩手県田老町。



ヒメハジロ 撮影 竹内 強

〔コウミスズメの大群〕

2月20日えりも岬付近を探鳥中、沖合の海上を往きつ戻りつするコウミスズメの大群を40倍のプロミナーで観察することが出来た。コケワタガモを見る目的で来道した会員の高梨敏子さん(横浜市)は、羽田さんと2人で19日コケワタガモの居た付近を中心に探鳥、「えりも」に

1泊翌日も探し続けたが肝心のコケワタガモは何処にも見当たらない。先週2月12日には雄2羽雌4羽が観察されたとの連絡を受け、探鳥リストに貴重な1種を加え、じっくりと此の珍鳥を観察出来る事に胸はずませて来た高梨さんに落胆の念は否めない。居る居らないは自然の成り行き、其れはそれとして何んとかして見て貰い度い一念で沖合を探し続けて居ると、海上一杯に右往左往しながら着水したり、飛び立ったりのコウミスズメの大群がプロミナーの中に入って来た。とても数え切れる数ではない。恐らく何千羽から万を越える真に大群である。海面上を水平に飛翔、着水を繰り返す群れは続いた。餌になる魚群を追っての行動なのか、単なる移動であるのかは分らないが、其の数の多さには只々呆然とするばかりで時の経つのを忘れさせる見事な出来事であった。

〔カワセミの越冬〕

多くの愛鳥家やカメラマニアの中でも、最も人気と関心の高いカワセミは、水辺のハンターとして其の見事なダイビングにコバルトの怪しい迄の美しさと、独特の風貌等、鳥を識る者達にとっては尽きない魅力です。

4月下旬渡来、2回の繁殖をした後、秋の深まりと共に越冬のため南の温暖な地方へ去って行きます。

今冬は記録的な暖冬少雪の影響なのでしょう、苫小牧市樽前433 森田哲也さん所有の沼に、昨年秋から1羽のカワセミが居残り春を迎えました。樽前山麓の此の一带は、きれいな水が湧き出る処として識られ、大小沢山の沼や川が点在し、野鳥の棲息にも良い環境としても識られており、特に動物や鳥好きの森田さんの所有している森田沼には多くの鳥達が集り、ウォッチングや写真の素材としても多くの人達が訪れる処です。年中変らぬ泉が湧き出して真冬でも全面結氷する事はなく、冬場はヤマセミの格好の餌場ともなっています。カワセミは毎年訪れ、此処を餌場に2回繁殖して秋にはいつの間にか見られなくなっています。

近年の最も遅い終認がS61. 11. 3、最も早い年がS62. 9月のお彼岸頃になっています。昨秋から居残った1羽は、昨春以来此処に棲み付き繁殖したものか、此処で産れたものか、他から移動して来て居残ったものかに就いては不明で一冬中、悪天候の日を除いては必ず決った場所に現れ、沼の「イトヨ」を主な餌として過していた。観察、写真撮影共、距離が遠く雌雄に就いても意見の分れる処で雄の若鳥の可能性が高いが、多くの人達の中には此れ迄の観察状況から雌雄或るいは、雌雄同志の複数の個体ではないかと推測する人も居るが2羽が同時に観察された例はなく推測の域を出ない。此の沼にはマガモ・ヒドリガモ・ホオジロガモ♀・カワアイサ・カイツブリ等が替るがわる訪れ、1月中にはオジロワシも、又ノスリも時折現れるのはいつもの冬と変りはなく、コミミズ

クが近くに渡来した事もあって、ヤマセミ、カワセミ、コミズクを目的の観察やカメラマニアが多く訪れた年であった。

本道でのカワセミの越冬の記録は少く、昭和55年～56年にかけて、道南の大沼で越冬したのを函館市の小松俊男さんと吉田省三さん等に依って確認されている。

最初に観察したのが小松さんと同行者で、12月21日国鉄大沼公園駅近くの駐車場側の浄水池で2羽(雌雄不明、其の後は1羽雌)で翌年2月22日迄吉田さん小松さん其の他の人達と数回に亘り同じ場所で観察された。其の後3月に入って間もなく3羽見たとする情報も聞いている。

大沼は冬期は結氷するが、沼に注ぐ宿野辺川河口、保養施設近くに温水が湧出し一部凍結しない場所も在る事等を考え合せ、小松さん等が観察した大沼公園駅近くの

浄水池以外でも越冬していた事は考えられる。

其の後も冬期に大沼公園を訪れているがカワセミを確認した事はない。尚此の年は雪の多い冬であった。

此れ等の珍しいカワセミの越冬は、苫小牧の森田沼ばかりではなく、千歳でも確認されたと言う情報も得ている事から、今冬の記録的な暖冬少雪に負うところなのかも知れないが又条件さえ整えば、越冬も可能なことを示したのものとして注目される出来事でした。

此の冬鳥の話題を取りまとめるに当り、多くの方々の貴重な経験記録等、様々な御教示を頂きました事に厚く御礼申し上げます。又生態・分布・習性・記録等に就きましては関係文献より引用させて頂きました。

(探鳥幹事 井上)



小樽探鳥と雑感

63. 12. 11 大町 欽子

12月11日、大勢のみなさんとバス2台に分乗し、小樽駅前を出発、祝津港を皮きりに第1、第3埠頭、港内など各処で観察をした。

祝津では、海から吹上る潮風が、この時期としては余り冷たさが感じられず、雪もチラチラ舞う程度で、じっくり観る事が出来た。

“ア、あれは何だ、アビだ、珍らしい” “シノリガモだ、コオリガモだ” あちこちからの声に“どれどれ、どこに”と双眼鏡で探しているうちに“ア、潜っちゃった”で、とらえる事が出来ずガッカリ。

ア、泳いでいる、と見ている間に、突然飛び込みスタイルで、お尻を上げ頭からポコッと潜ってしまい、浮ぶのを今か今かと待っていると、遙か彼方にポッカリ浮び上がり、ずいぶん長く息が続くもの、と妙な感心をしている。本当に鳥というのは着きがなく、バタバタと泳ぎ、動きまわり、観る方もなかなか楽でない、と思う。

だが、カモメ、カモ類のように水面をゆったり泳いで、可愛い、又美しい姿をいつまでも見せてくれるものもある。

今回はウミスズメを、よく観る事が出来た。本当にスズメを少し大きくしただけのようにそっくり。1羽飛び立つとバサバサと、群をなして飛去ってしまったのは、何と言う鳥だったかな。

ウミアイサの頭は緑色と教えられ、いくら観ても黒しか見えなかったり、アビとオオハムなど色が違うのに、

形が似ているので見分ける事ができなかつたりする。

今回は26種類、めずらしい鳥も見れた事でもあり、ほぼ満足出来る探鳥会であった。と言う事だが、自分で判断出来たのは4、5種類ほど、まだまだ皆目見当もつかない、という現状である。

家の付近でも、可愛い小鳥や、少し大き目の黒っぽい鳥が、道路に下りたり、木の枝を飛び廻っているのを、よく見かけるが、名前が判らない事には、観る楽しさも半減してしまう。

みなさんのように、声を聞いただけ、又サッと飛び立ただけで“ア、あれは何という鳥だ”と覚えられるのはいつの日だろうか。

Tさんから贈って戴いた“日本の野鳥”の本を、暇あるごとにページをめくり、歩き廻るなどして、早くみなさんと一緒に探鳥の会を、楽しみたいと思っている。

〒002 札幌市北区篠路6条6丁目5-12

昭和63年12月11日(日)曇り時々雪 10:20~13:30

〔記録された鳥〕オオハム、アビ、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミウ、ヒメウ、ウミネコ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、シロカモメ、ミツユビカモメ、ユリカモメ、カモメ、ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、トビ、ハクセキレイ、スズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ドバト 以上26種

〔参加者〕三浦美重子、田中志司子、佐藤恒彦、伊藤恭

子、新田キノ、岩渕登起子・恵子、佐々木友子、鈴木千鶴子、前田稔、巴変ミヨコ、五十嵐、小林春美、斉藤恵美子、加藤チヅ、森岡弘美、梅木賢俊、武沢和義・佐知子、大町欽子、荒川真須美、仲山裕子、木村景子、羽田恭子、堀内進、今泉秀吉、戸津高保・以知子、榊川保・弘子、佐川節子、今野弘、田中礼子、西川喜久世、綿谷千冬、竹内強、泉勝統、青江正、矢野玲子、高橋孝次・

洋、志田博明・政子、長谷川涼子、谷ロー芳・登志、佐藤典子、巻勝良、犬飼弘、森田新一郎、永島良郎・トキ江、増田功、中村ひろみ、杉田範男・智恵子、逸見康夫、大野信明、中野高明、渡辺俊夫、井上公雄、富樫敏雄、霜中愛子、坂根、本塚初美、柴田良雄、清田吉晴、松山佳則 以上68名(野鳥の会小樽支部よりの参加者7名)
〔担当幹事〕中野高明、渡辺俊夫、井上公雄

藤の沢(白鳥園)探鳥会に参加して

1. 1. 22 鎌田 玲子

たくさん鳥を間近に見ることができるというお話を聞き、参加を楽しみに車を走らせました。

着いた藤の沢は、自然がいっぱいの一面の銀世界。会場の白鳥園には大きな餌台が作られていて、ハシブトガラやシジュウカラが次々と飛んできて、餌を啄んだり、枝から枝へ飛び移ったり。ヒヨドリ、カケス、アカゲラ、ゴジュウカラも訪れ、すぐ目の前でその姿を十分に見せてくれるのが嬉しく、夢中になって双眼鏡を覗いていました。こんな所で一日鳥を見ていたら幸せだろうなあと考えながら。

さて、会が始まり、初めは小沢さんのお話。人間がもっと鳥の住める環境を考えてやらなければならないとお話になり、みんな頷きながら聞いていました。その間も、窓の外の鳥が気にかかります。お昼の心づくしの豚汁のおいしかったこと。その後のゲームも、さすが鳥の会だけあって、全て鳥に関すること。シークワーズは、鳥の名前を消して残った文字を読むというのですが初心者の私は四苦八苦。図鑑でカンニングしたり、グループの人に教えてもらったり。次のクロスワードはさらに難しく、ヒントを読んでもさっぱりというありさま。最後のカモの種類当ても……。いくつかは見たはずなのに。お楽しみのプレゼントも鳥づくし。幹事さんのご苦労で、とてもいい日曜日を過ごすことができました。

妹に誘われて初めて探鳥会に参加したのは6月の植苗。その頃は本当に何もわからず、最後の鳥合わせでは36種でも、私が見ることができたのは、ほんの数種というありさまでした。その後、平和の滝、野幌森林公園、ウトナイ湖、小樽、苫小牧と連れて行っていただくうちに少しずつ鳥の姿を見つけることができるようになり、図鑑と首っぴきで姿と名前を一致させようとがんばっています。この頃は道を歩いても鳴き声がすると立ち止まり、その姿を探すようになりました。そして、三日前から、わが家のベランダにかわいいお客さんが訪れるようになりました。2羽のヒヨドリです。テレビの音を小さくして、りんごを啄む姿をじっと見ていました。こんな所(マンションの3階)によく来てくれたと感激しながら、もっとたくさん鳥が訪れてくれるようにと願いつつ、毎朝七時半頃を楽しみにしています。

くして、りんごを啄む姿をじっと見ていました。こんな所(マンションの3階)によく来てくれたと感激しながら、もっとたくさん鳥が訪れてくれるようにと願いつつ、毎朝七時半頃を楽しみにしています。

〒006 中央区大通西26丁目

平成元年1月22日(日)晴 10:00~14:00

〔記録された鳥〕アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、スズメ、カケス、ハシボソガラス 以上9種

〔参加者〕豊口肇・美代子、佐々木友子、竹内強、堀内進、道川富美子、野口正男、佐藤勇、柳沢信雄・千代子、山田良造、清水朋子、小堀煌治、西川喜久世、綿谷千冬、志田博明・政子、佐々木武己、鎌田玲子、大西典子・尉仁、田中礼子、井上公雄、犬飼弘、泉勝統、今野弘、武沢和義・佐知子、大町欽子、岩山英輝、霜村耕一・佳代子・耕太、川島幸子、長原友美、小沢広記、大野信明、戸津高保・以知子 以上39名

〔担当幹事〕戸津高保、道川富美子、竹内強



冬の原始林を歩いて

1. 2. 12 田畑 博

野幌森林公園で行われた「冬の動物観察会」に参加しました。探鳥会などの自然観察は、できるだけファミリーで参加するようにしています。わが家は妻と3才、7才の娘の4人家族です。2人の娘は昨年、クマガラに遭遇したのを機に野鳥に興味を持つようになり、今では探鳥会に出かけるのを楽しみにしております。当会主催の観察会の以前に野幌森林公園を訪れ、エゾユズリハコースを回ったのですが、下の娘は雪道に手こずっていたため、今回は距離もあることから、夫婦だけの参加としました。

天気も良く、大沢口駐車場にはたくさんの方が集まりました。新聞を見ての参加でしたので皆さんとは初顔合わせ。午前9時過ぎ、歩くスキーと長靴組に班を作りいよいよ出発です。私たちは長靴組でした。

しんと静まり返った世界に足を踏み入れると、日常気にもとめていない五感が細やかに働いています。ギュギュと雪を踏みしめる爽快な音、木々に積もった雪が枝を震わせながら落ちる音、耳を澄ませばいろいろな野鳥のさえずりが聞こえてきます。松や笹の葉の香りも感じられ、何もかも体に心地よく入りこんでいきます。特に今年は少雪暖冬で街は車粉が舞い、環境が悪化しているだけに、空気が新鮮でおいしく感じます。

野鳥を追っていると、ところどころに葉の落としたハンノキの枝先に鳥の巣のような「ヤドリギ」(宿木)が生き生きと葉や実をつけているのに気がつきます。ヨーロッパではヤドリギの下を通ると幸福になれると言い伝えのある縁起ものです。これで今年一年は大丈夫だねと妻と冗談を言いながらの観察。冬の天下をとったようなレモンイエローの実が誇らしげに息づいています。キレンジャクなどが好んで食べ、自らその種を運んで他の木の枝に根づかせるのです。鳥と植物が互にかかわりあいながら生きている自然界の一面を垣間見たような気がします。

ほおと、のどがピンク色のウソに出会い、じーっとしているのでスコープでゆっくり観察。体が小さいが尾の長いエナガ、頭上の黄色は見えにくかった日本で最小の鳥キクイタダキ、その他マヒワ、コゲラを見ることができました。

エゾユキウサギ、キタキツネ、タヌキなど動物の足跡を期待したのですが、新雪などの条件が整わず観察できませんでしたが、野ネズミの足跡とシッポを引きずった跡を発見し、エサを求め精一杯冬の森を生きぬいている様子に感動しました。日々、生きるか死ぬかの危険にさらされながら、たくましく野生動物は生きています。キ

タキツネにとっては冬は恋愛期でもあり、求愛ダンスの足跡を発見すると、勝手にラヴストーリーなんかを創作すると楽しいでしょうね。そして春には子ギツネの誕生です。

大沢園地で昼食をして一休みしたのですが、私たちは午後から用事があって失礼させていただきました。桂コースを歩いて大沢口に戻ったのですが、青空が広がり、穏やかで静寂な原始林は、まさに地上のオアシスです。歩くスキーを楽しんでいる方に行き交うと「コンニチワ」と自然と声を駆け合います。これも自然を愛する人々の心の通じ合いから生まれるものだと思います。

冬の森の動物観察会は、私たちにとって大自然のすばらしさを学んだ充実の一日でした。これを機会に野鳥愛護会に入会し、また皆さんと探鳥会などに参加させていただきたいと思います。

(注: なお本探鳥会は北海道自然保護観察指導員連絡協議会との共催でした。)

〒061-32 石狩町花川南2条6丁目105

元. 2. 12 野幌 9:00~12:30 晴れ

〔記録された鳥〕トビ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマゲラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、マヒワ、ベニヒワ、ウソ、シメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上22種

〔参加者〕香川稔、泉勝統、大西典子、田辺至、鎌田玲子、川守田順吉、萩原俊男、井上公雄、林茂一、大野文明、豊口肇・美代子、柳沢信雄・千代子、宇井晴穂、佐藤恒彦、佐々木武巳、武田洋子、榊川保・弘子、戸津高保・以知子、村野紀雄、白澤昌彦・光明、渡辺紀久雄、田畑博、福井、和田、信本、新田キノ 以上31名

〔担当幹事〕白澤昌彦、渡辺紀久雄





【野幌森林公園】

平成元年5月7日(日)

留鳥のカラ類 キツツキ類は、囀りやドラミングを繰り返して居るものもいます。

既に渡って来て縄張り宣言に美声で歌って居るもの、長旅の疲れを癒すもの、そしてもっと北へ向うもの等様々です。美しい囀りに誘われ姿を探すには、樹の葉の無い此の頃が最適で、キビタキ・オオルリ等の夏鳥の初認も概ね此の頃です。エゾエンゴサク・ニリンソウ・ヒトリシズカ・其の他野の花を見る楽しみも、加わります。

午前9時 大沢口駐車場入口集合

【千歳川周辺一泊早朝探鳥会】

土曜日の夕方集合。翌早朝からの一泊早朝探鳥会です。ジンギスカン鍋を囲んでの野鳥の話題は尽きなく、時間を忘れさせます。未だ暗い夜明けから、アカハラ・クロツグミときにはアカショウビンの鳴き声に目を覚し、ニュウナイスズメ・ハシブトガラ・ヒガラ・アオジ等の爽やかなコーラスの中を進んで行くと、やがてホオジロ・ツツドリ・キビタキ・オオルリ・そしてヤマセミの飛翔に出会う事もあり、探鳥ムードは嫌が上にも盛り上ります。

(1) 日 時 平成元年5月13日(土)午後7時より15日(月)午前4時 探鳥開始 午前中解散予定

(2) 場 所 サンポートガーデン 千歳市蘭越町5番地 電話 01232-3-3741

(3) 会 費 2000円(夕食付ジンギスカン鍋) 朝食は各自持参 ※宿泊設備がないため(昼の部屋はあります)寝袋などご用意下さい。

※ 自家用車の方は直接サンポートガーデン集合(駐車場有り)列車・バスの方は午後6時30分 JR千歳駅待合室集合 駅から現地までタクシーを利用します。

※ 参加申込 4月と5月の野幌森林公園探鳥会の折受付けます。電話の場合は、5月12日迄に011-551-6321 井上まで

【植 苗】 平成元年6月11日(日)

ウトナイ湖に隣接した草原が今日の舞台です。此の時期草原性の夏鳥 ノビタキ・オオジュリン・シマアオジ・ノゴマ・ホオアカ・コヨシキリの何れ劣らぬ名歌手が得

意の喉を競い合いカラフルなシマアオジ・おしゃれなノビタキ・凜しいノゴマ等が主役です。

ウトナイ湖ではコブハクチョウやカモ類が、可愛らしい雛鳥を連れて湖上を散歩する姿を見かける事もあります。

其の日のお天気に依っては意外に気温の低い事もありますので1枚余分に用意して置くと安心です。

午前9時10分 JR千歳線植苗駅前集合

【東米里】 平成元年6月18日(日)

残された僅かな自然?を求めて草原性の鳥が訪れる郊外の一角にノビタキ・アカモズ・ホオアカ・オオジュリン・コヨシキリ等を見ることが出来ます。

昨年はノゴマ・コウライキジ・アリスイ等32種を記録していますので未だまだ貴重な探鳥地です。

午前8時30分 東米里小学校前 集合

市営バス米里線 東米里小学校前下車

【平和の滝 夜の探鳥会】 平成元年6月24日(土)

一日の名残りの囀りも途絶え、やがて夜行性の鳥の活動が始まります。大きな羽ばたきと鋭い鳴き声を上げながらヤマシギが飛び回り、ヨタカガリズミカルに鳴き始め愈々夜の探鳥の幕明けです。期待のコノハズクが鳴き出す頃にはすっかり暗くなり規則正しく鳴き続ける声に耳を傾けて居ると奥深い山中に居る心地がします。

鳥を刺激しない様私言を慎み懐中電燈の使用も控え、静かになが夜の探鳥のマナーです。

午後6時30分 平和の滝駐車場集合

市営バス西野平和線平和の滝下車 徒歩20分

【福 移】 7月2日(日)

近年河川敷の大がかりな改修工事が施され且って野鳥の生息環境で在った疎林帯も姿を消し周辺地域の様相が一変しました。斯した環境の変化が野鳥の生息に如何関わって行くものかも見据えての探鳥になります。

1羽でも1種でも多く残って居て欲しい念いです。

午前8時40分 市営バス札苗線福移入口停車所集合

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成元年5月21日(日) 6月4日(日) 7月9日(日)

午前9時 大沢口駐車場入口集合

何れの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

昼食・筆記用具・観察用具・雨具等をご用意下さい。

探鳥会のお問合せは 001-551-6321 井上まで

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287 ☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465